第４９回車座集会意見交換内容（宮前区）

１　開催日時　令和２年２月１９日（水）　午後３時から５時まで
２　場　　所　宮前区役所　大会議室
３　参加者等　参加者３０名、傍聴者５０名　　合計８０名

＜開会＞
司会：ただいまから第４９回車座集会を始めさせていただきます。本日の司会を務めさせていただきます宮前区役所地域ケア推進課の荒川です。よろしくお願いいたします。
　本日の車座集会は、コミュニティカフェと町内会自治会、さらにはまちづくりや生涯学習の団体などの多様な主体が連携することにより、宮前区における見守り・支え合いの輪を広げるために何ができるかなど「カフェ連絡会の取組から『まちのひろば』を支えるしくみを考える」をテーマに開催します。
それでは、行政からの出席者をご紹介させていただきます。
　福田紀彦川崎市長、髙橋哲也宮前区長です。

司会：それでは、福田市長から、一言ご挨拶を申し上げます。

＜市長挨拶＞
市長：皆さん、こんにちは。今日は、車座集会に参加をいただき、ありがとうございます。というよりも、いつものカフェ連絡会のほうに、私がお邪魔している感覚のほうが正しいのかもしれませんけれども、宮前区は本当に居場所としてのコミュニティカフェ、これだけ多くできているということに、すごく驚きと同時に、またそれが５０以上あって、そのうちで３２団体がこの連絡会に集って、いろんな形で意見交換しているということに、心からの敬意を表したいと思います。
　本題に入りますけど、宮前区でも高齢化が確実に進んでいますし、おひとりで暮らしている方が多いと。川崎市で、今一番多い世帯というのは、ひとり世帯。今、市内で７４万世帯ぐらいありますけども、そのうちの最も多い世帯というのは、ひとり世帯。これは今、４１％ぐらいあるんです。若い方のひとり暮らしもいますし、高齢の方のひとり暮らし。昔だったら、やっぱり親子の世帯というのが最も多かったということですが、これがもう３割を切るという時代なので、この二、三十年で変わっているんですよね。
　そうした中で、やっぱり地域のつながりをつくっていって、そして、ひとりでも寂しい思いをしてもらっちゃ困ると、そういう中で、このカフェの担う役割ってすごく大きいだろうと思います。そのことについて、私も、今日皆さんからいろいろ学ばせていただきたいと思いますし、もっともっと情報共有できればと思っております。今日は、どうぞよろしくお願いいたします。

司会：ありがとうございました。
　それでは、本日の進め方について、ご案内いたします。お配りしております次第をごらんください。
　本日は、テーマを三つに分けて進めてまいります。４名の方から、それぞれの取組について発表していただくことになっておりますが、参加者の皆様にも、日頃の取組やご意見などをお聞かせいただきながら進めてまいりたいと思います。
　日頃、皆様が運営されているコミュニティカフェは、地域包括ケアシステムにおいて、地域住民同士のつながりを育む、大変重要な互助の基盤となっております。
　また、川崎市が、昨年４月に策定した、これからのコミュニティ施策の基本的考え方の中で、誰もが気軽に集い、多様なつながりを育む地域の居場所のことを「まちのひろば」と呼んでいます。まさに皆様の活動

一つ一つが「まちのひろば」であると認識しております。
　地域の居場所としてのコミュニティカフェが、これからさらに、どのような役割を担い得るのか、またカフェ連絡会が今後、どのような団体になっていくのが望ましいのか、地域の支え合いをより一層推進していくにはどのような取組が有効なのか、今日の取組発表や意見交換の中で、会場の皆様と一緒に考えていくことができればと思っております。

＜取組発表と意見交換＞
司会：早速ですが、「コミュニティカフェの果たす役割」についての取組発表と意見交換に入りたいと思います。
　　では、最初の発表者は、向丘地区にある「カフェふらっと」代表、西村颯香さんです。
　　西村さんは、ご自宅でミニデイ「ふれあいサロンさつか」を主宰しています。昨年より、若い世代にも活動を引き継いでもらいたいと、「カフェふらっと」も立ち上げました。それでは、西村さん、よろしくお願いいたします。

西村さん：皆さんこんにちは。私は、宮前区平というところで、高齢者ミニデイサービス「ふれあいサロンさつか」を運営しております西村颯香と申します。
　「ふれあいサロンさつか」は、今年で１３年目を迎えることができましたが、長い間、実践上、いろいろと問題が現れてきました。その一つといたしまして、自宅を開放してやっていることもあり、後継者の育成ができていない。二つ目は、同じ利用者さんとボランティアさんが対象ということで、世代間交流がずっと変わらない。三つ目は、地域と連絡をしていないために、地域との交流がない。このような問題点があらわれてきました。
　世代を超えて、お互いに支えい、助け合う地域包括ケアシステムの中の５条を実現することと、それから、平の地域を活性化させるためにはどうしたらいいかと、私なりに考えてみました。
　そうしましたら、世代を超えて支え合う、お互いに支え合うという世代間交流の場としてのコミュニティカフェを平の地域に存在させることが必要ではないかと考えました。それで、コミュニティカフェを企画、運営していくことにいたしました。
　コミュニティカフェの名前は、平なので、「カフェふらっと」といたしました。場所は、平いこいの家を利用させていただくことにいたしました。曜日と時間は、今年の４月から、おかげさまで朝１０時半から午後３時までお借りすることができました。
　ちなみに、コミュニティカフェというには定義がありまして、地域社会の中の居場所とか、たまり場とかというふうになっています。人と人がつながることを大事にするところで、ふらっと行っても大丈夫というようなことが定義とされています。
　それで、コミュニティカフェを、「カフェふらっと」を運営するに当たって、私が２点、非常にこだわったことがあります。それというのは、一つ目といたしまして、各町内会から出てほしいということですね。同じところの町内会じゃなくて、各町内会から一人ずつ出てほしいなと思いました。そして、次の世代に渡したいので、できたら、私より若い人、できるだけ若い人をお願いしたいと思いまして、第１回目の準備委員会が、２０１８年６月２日に設けることができましたが、おかげさまで、年齢が３０代が１名、４０代が６名、５０代が３名、６０代が２名、７０代が２名の計１４名で、男性が１名入ってくださいました。
　それと準備の委員会が、２０１８年の５月から２０１９年４月まで、計１１回設けることができまして、去年の２０１９年４月２７日に、無事、第１回目の「カフェふらっと」がオープンすることができまして、今日に至っております。
　以上でございます。

司会：ありがとうございました。では、次に、もう一つ、事例をいただきたいと思います。

富士見プラザ地域包括支援センターの伊藤祐輔センター長です。

富士見プラザ地域包括支援センターは、地域と一緒にカフェを運営する傍ら、新たなカフェの立ち上げや運営の支援にも積極的に取り組んでいます。それでは、伊藤センター長、よろしくお願いいたします。

伊藤さん：皆さんこんにちは。私、東有馬地区を担当しています、富士見プラザ地域包括支援センターの伊藤と申します。

今日は、本年度４月から立ち上げました二つのカフェのご紹介と、そこから見えてきたという役割についてというところでお話しします。

どちらも住民の方との共同開催という形で、実施しており、本日は時間も限られていますので、内容と結果に絞ってご説明いたします。

まず一つ目、パンカフェから説明させていただきます。

内容に関しましては、パンづくりを通して高齢分野にこだわらず、障害、児童など多世代の方が集まり、交流ができる場をつくり、地域の活性化や住民同士の相互理解を図りながら運営していくことをやっています。

こちらは月２回開催で、１回３００円をいただいています。フリードリンク制という形を導入しております。

こちらが、ほんのごく一例ですが、参加者の方たちがつくっているパンになります。

結果ですが、まず一つ目に、パンというものづくりを目的に、個々のアイデアを自由に生かして、形や味などお好みのパンを作ることで、参加者の満足感、楽しみを得られたと、非常に好評な意見をいただいています。

二つ目には、パンをつくる過程で、どうしても待たなければいけない発酵時間というものがあるんですが、これが逆に、皆さんの交流を図る時間となり、交流の活性化にもつながっております。

三つ目には、これは私自身のうれしい誤算でもありましたが、スタッフの方たちの動機づけをどういうふうに持続させていければいいかなというふうに思っていたところ、参加者の方たちがおいしいと言う声が今では大きなモチベーションにつながっていると感じているところです。

四つ目には、こちらのパンカフェのほうを障害者援施設で運営しているという中で、障害者の方と交流を持てるようになりました。今も毎回、障害をお持ちの方に参加していただいているところで、冒頭でもご説明したとおり、本当に多世代交流を目的にしているところで、偏見や差別なく、このカフェの運営ができているかなと感じております。

最後になりますが、スタッフ、参加者の垣根が低いことでというところで、この場が情報交換の場となって、さらなる社会参加につながる機会をつくれているかなと思っております。皆さん、不安なこととか、心配事を話される方もいらっしゃるんですが、そういったものを吐き出すことで、安心や意欲につながってというところで、また、社会参加につながっていくのかなということも、実際に私の中では目の当たりにしているところであります。

二つ目に、健康づくりカフェをご紹介いたします。

毎月異なる関係機関からの協力をもとに、「健康と交流」というキーワードを掲げ、さまざまなプログラムを実施しております。その中で、住民の方々の健康への自主性、自発性など自助努力のきっかけになることを目指しております。

こちらは月に１回開催で、１回２００円、そして、こちらもフリードリンク制を導入しております。

結果に関しましては、こちらは、「健康」というキーワードに対して、関心高く生活されている住民の

方々を、改めて認識できました。またまた、そもそも日常生活から、その視点を持って生活されているということも、改めて理解させていただきました。

二つ目に、当然といえば当然かもしれないんですが、「健康」という同じキーワードでも、皆さんそれぞれ考え方や価値観が異なっているということで、こちらも、私たちも考えさせられたり、参加者同士の交流の活性化にもつながったかなと思っております。

さらに、三つ目なんですが、この包括支援センターならではになるんですが、こういったイベントを通してというところで、日頃のネットワーク強化にもつながって、また、日頃の業務にも生かせるようになっているかなと感じております。

最後、まとめになるんですが、この二つのカフェから見える地域包括支援センターとしての役目は、さまざまな人たちや地域を「つなぐ」ことであるかなと思っております。そして、その場に参加した方同士がつながっていくことで、さらに地域づくりや、地域の活性化につながっていく期待が持てる。つまりは「様々な面において繋がっていくこと」が、私が考える限りは、コミュニティカフェの果たす役割ではないかと思っております。

現在、包括や区役所で把握しているカフェの数は、私は実数ではないと思っております。なぜなら、コミュニティカフェという定義自体が、人それぞれ、たくさんの人が集まらないとか、大義名分をかけないといけないんだという理由で、あえて言っていない、広報していないカフェも実際にあるからです。でも、私は、少人数でも、ただ楽しくを目的にでも、活動をしているカフェは立派なコミュニティカフェだと思います。そして、その中心で活動している方は、本当に私はすごいと思っております。

今日、この中で実際にカフェを運営している方がいらっしゃいましたら、改めて自分を褒めてください。

また、こういったカフェに興味のある方、参加したいとか、立ち上げたいという方は、まずは楽しむことを基本にして始めてみてはいかがでしょうか。そして、それを続けていくことで、さまざまなものがつながっていき、それが皆さんの住む地域が、さらによりよいものにつながっていくのではないかなと、私は信じております。

以上になります。ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。

では、市長、ここから進行のほうをよろしくお願いいたします。

＜意見交換＞

市長：西村さん、伊藤さん、ありがとうございました。

すばらしいですね。まず伊藤センター長のところ、パンカフェには驚きましたね。パンというものを使うんだというのは、こういう仕掛けってあるんだなと。飲み物、もちろん、今日のコーヒーやおやつもそうですけど、何か食べる物って、人をほっこりさせるし、コミュニケーションが始まる一つのきっかけになると思うんですけど、パンをつくる、そして、その発酵の時間を使う。誰が考えたんですかというぐらい、いいアイデアだなと思いました。

ほかに、こういう仕掛けを持っているよという方はいらっしゃいますか。パンみたいな、こんなつなぎとめをやっていますよ。コーヒーでも、こだわっていますとか、あるいは、どんなものでつながっていますよという、つなぐ何か、やっている方、いらっしゃいませんか。パン、ちょっと、どんな感じでやられているか、教えていただいてもいいですか。

吉永さん：私は簡単に言うと、自分のモチベーションなんです。自分の新しくつくりたいパンがある、でも、我が家は二人なので、食べるのにはちょっと抵抗がある。では、誰かに来てもらおう。来てもらって、甘

い、しょっぱい、辛い、教えてもらおう。ちなみに、明日、みそづくりです。

市長：すごいね。パンの次は、みそが来ましたか。

吉永さん：明日は、若い方が。

市長：明日は若い方。もともと、コミュニティカフェを始められたきっかけが、今おっしゃった、そのパンを食べてもらおうかなというところからですか。

吉永さん：そうです、そうです。自分のつくったものを誰かに評価してもらいたいなという、それだけです。

初めは、友人に来て来てと言っていたんですね。友人も苦痛になりますよね、毎月毎月言われると。なので、友人には一切もう、いついつやる、もうこれは決まりということで、あとは連絡しないで、あとはちょっと、今ふうのツールを使って。あと、ご近所をちょっと口コミですかね。させていただいています。もう自分のためです。自分が楽しむため。

市長：すごい。すばらしい。ちょっと、皆さん拍手ですね、これ。

吉永さん：おいしいですよね。今日のお菓子もそうですよ。

すごい簡単で、すぐできちゃうんですけど、何か食べてもらうと、おいしいと言われると単純にうれしいじゃないですか。それだけです。

市長：ありがとうございます。すてきな話。

こちらですか。これちょっと、いただきますね。

伊藤さんのところも、やはり、生地はスタッフの方がつくっておられて、それが褒められて、モチベーションにつながっているということですね。すばらしい。

ほかに、こんなことをやっているよという方って、いらっしゃいますか。

海老澤さん：白幡台で坂の上カフェというのを月１回やっているんですが、今のつなぎとめのツールとしてという大きな目的が二つほどありまして、一つは、食べ物からいきますと、我々、地域の中で、障害者の皆さんの事業所がありまして、そこでお子さんたちがクッキーをつくって焼いているんですけど、それを私どもに入れていただいて、カフェに出して、コーヒーと一緒にそのクッキーを食べていただくと、そういう、それが一つですね。

それと、非常に評判がいいのが、これは食べ物ではないんですが、コーヒーですから、コーヒールンバをご存じですよね、皆さんね。コーヒールンバを、おいしいコーヒーに、私どものスタッフで、コーヒールンバを皆さんの真ん中で振りつけをして、手づくりりのマラカスを持って、それで皆さんの前で踊りまして、見ている方が、みんな、このマラカスを持ちまして、全員でコーヒールンバを踊る。これが非常に評判がよくて、皆さん、喜んでいただいて、そういう座を非常に盛り上げるというか、そういうことで、もちろんおいしいコーヒーを皆さんに提供するのが一番なんですが、そういうものをあわせて、コミュニティの輪を広げ、皆さんが気分よくお話をし、帰っていただくというふうな仕掛けをしております。

市長：ありがとうございます。これも、皆さん、拍手ですね。

すごい。皆さん、持っていますね、いろいろ。聞くと、みんな、それぞれ出てくるんじゃないかと思

いますけど。

実は、私たちの市の職員で、井田病院の医師で西さんというお医者さんがいるんですけども、日経新聞の１面で取り上げられました。彼、何やっているかというと、社会的処方というものをやり始めたんです。お医者さんというと、普通、治療して、薬を処方するという形で、処方せんを書きますよね。なんですけど、本当にこの人が元気になるためには、薬だろうかと思うことがあると言うんですね。いや、むしろこの人に、元気になってもらうのに必要なのは、地域の活動なんじゃないか、つながりなんじゃないかということで、彼らの仲間と一緒に、中原区の近辺のいろんな地域資源をみんなで探して、それを冊子にして、あなたにはこういう活動があっているんじゃないかというのを、コミュニティカフェだったり、あるいは体操だったり、音楽サークルだったりということを、お薬じゃないんですが、地域活動を処方してあげるということが、本来、自分が医師として、この人を元気にさせてあげたいという思いに合致するんじゃないかということで、いろんな地域の人たちとＮＰＯをつくって、そこでやっているんです。だから、医師としての活動は病院で、病院から出たら、そういった社会的処方という手段を使って、今、やり始めているんです。

ですから、皆さんがやっていただいているこの活動というのは、まさに地域にとってのビタミンだったり薬だったり、そういう存在なんじゃないかなということを、今、ほんの数分、話を聞いただけでも、すごいそんな気分にさせられて、ちょっと僕、今日は興奮ぎみです。

西村さんの取組、お一人で、それこそ十二、三年前から始められて、ボランティアの人たちとやり始めて、だけど、これをもう少し、多世代でとか、地域とのつながりをと考えたときに、自治会・町内会の皆さんとも相談してと。すばらしい発展の仕方ですよね。

しかも、町会の人たち、大分若い人たちもということで。

西村さん：後ろにおりますのが、町会の若い人です。

笹岡さん：一応、若い人。４０代で同じ町内会で、声をかけられるまでは、全くコミュニティカフェということ自体を全く知りませんでした。家がご近所で、ちょこちょこ西村さんの家の外で、バザーみたいなのをやっていたのは知っているけど、見たこともないし、中に参加したこともないし、ただ、西村さんから、多世代の交流のカフェをやりたいと、手伝ってくださいということで、できる限り、やらせていただきます。もう今は、相談されてから２年たちました。３０代の方もいらっしゃいまして、結構、いろんな世代の方の意見が聞けて割と楽しいです。毎月２回、やっております。

市長：うれしいですよね。若返りのメンバーが、いっぱい入ってきたという感じで。

先ほどの年齢構成で見ると、大分お若いですよね。かなり、何十年も持続可能な仕組みになっていっているなという。

西村さん：そうです。大丈夫です。

市長：これ、でも町会とつながるって、すごく大事ですよね。

西村さん：カフェふらっとを運営する前に、まず町会のカフェをつくりました。だから、我が家で毎週１回、ふれあいサロンさつかをやっていまして、先ほどもお話ししたんですけど、最初は一泊旅行にも連れていっていました、高齢者を。１日バス旅行、もういろんなことをやりまして、でも、やはり周り、ご近所だけでは、やはりまずいかなと思いまして、町内会のカフェをつくりました。

それで、町内会のカフェだけでは、やはり、うーんと思って、平の地域を何とかしたいなと思いまして、平の地域の人たちを集めました。平一丁目から六丁目、神木本町を入れまして。

市長：なるほど。ありがとうございます。
町会とうまく関わっているよという方、大体。
ちょっとご発言いただいてもよろしいでしょうか。

高橋さん：土橋のカフェです。土橋町内会の会館をお借りしていますので、一応、町内会の役員をやっていらっしゃる方も、皆さん、スタッフとして関わっていただいていますし、町内会館の使用料をおまけしてもらっています。

市長：ありがとうございます。
川田さんは、もう本当に、町会をやって、そしてカフェも実践されるという、ダブルワーク、トリプルワークという感じですけど、町会とつながることの大事さというのを一番よくおわかりなんじゃないかと思うんですけども、ちょっと、ご意見というか、どなたでも結構ですけども。お話しいただいてもいいですか。

大内さん：川田さんが上に立ってやらせていただいているメンバーって、毎週なんです、火曜日に。でも、やっぱり最初は人数が集まらなかったんですけれども、だんだんと集まるようになりまして、楽しみに皆さん、毎週１回、顔を合わせて、西住宅の全体でやっているので、コーヒーも無料で飲めますし、毎月第２火曜日はカレーをつくって、楽しみに皆さん、カレーを食べに来ていただくんですね。それが、皆さん励みになって、やらせていただいています。

市長：ありがとうございます。
皆さんのところも多分そうでしょうけど、月に何回、第何曜日というふうなのを決めて、ここに、この日に行けば、あるんだなということというのが、皆さん、だんだん浸透してくるということですかね。ありがとうございます。
ほかに、町会ともうまくやっているよという方、いらっしゃいますか。お願いします。

中村さん：稗原団地自治会のひえだんカフェです。ひえだんというのは、通称、どこへ行っても稗原団地と言わずに、ひえだんと言いますので、名称を考えるときに、ひえだんカフェとつけました。これも、３年前ぐらいからカフェをみんなでやりたいという希望が集まってきまして、それで、自治会館を使わせていただこうかという話だったんですけれども、自治会館はとにかく古くて、どう装飾してもカフェにはあわないねという感じで、非常に悩んでいたところ、ちょうど自治会の中心部に、デイサービスのケアの施設ができたんですね。セラピストデイ菅生というところができたんです。そこの方たちが、何か地域で役に立つことがあれば、何かして協力したいという申し出があったので、自治会長も、これだということで、会場をお借りすることにしました。それで、毎月第３日曜日ですけど、そこの施設をお借りして、開催するに至りました。
開催するといっても、準備とかスタッフの募集とか、いろいろ自治会と、それから老人会と、それから民生委員さん、みんなもう、スタッフの中心になって運営していこうというスタンスで、最初にスタッフ募集から始めまして、大体３グループぐらいに分かれて、四、五人のメンバーが集まってくださって、今、皆さんのお世話をしてくだっております。

そういう施設ですので、飲み物は、もう本当にフリードリンクというか、その施設で使っている飲み物の機械を使わせていただいてという形でやっております。あとは、いろいろ毎月何か皆さんに喜んでいただけることを心がけてということで、プロというか、自治会の中で音楽教室を開催している方とか、それから読み聞かせのプロがいらっしゃるとか、そういう方たちに声をかけて、毎月、何かをやっていくということで、皆さん、楽しみにしておりますし、それから、そこのデイサービスのスタッフの中で、必ず体操をしてくださるという。毎回、１５分から２０分の体をほぐす体操を、その施設のスタッフがやってくださるという。そんなところで今、大体３０名から４０名の方が楽しみに、また声をかけ合って、越してきたという方がいらっしゃると、行きませんかということで、誘い合いながらやっております。

市長：大きいカフェですね。すばらしい。ありがとうございます。

今、場所の問題がありましたね。それから、いろんな、そのおもしろいことを提供していただける人材の話もありましたけども。今、言われたように、実は特別養護老人ホームだとか、ああいう施設は地域開放のコミュニティスペースみたいなのを設けているというのが大体ですよね。そこの利用は、意外とされている施設と、されていない施設って、非常に大きいなというのは、この前麻生区で車座をやったとき、場所がない、場所がないというふうな話だったんですけども、施設の方から、いや、場所ありますよ、もしよかったら使ってくださいという話というのは、意外と小さなエリアの中でも、意外とマッチングするケースってありますよね。ですから、そういうのって、やっぱり感じませんか。会長なんか、いろんな施設へ行かれたりしますけれども、ちょっとコメントをいただいていいですか。もっと使ってもらってもいいよなみたいなことを思いませんか。

浮岳さん：社会福祉協議会の浮岳でございます。

今、場所のことでありますけれども、３年、もう４年になりましょうか。社会福祉法の改正というのがございまして、かなり大きな改正でありました。その中に、社会福祉法人は地域貢献をしろという、かなり厳しいお達しでありました。それで、ところが法人さんは、何をすれば地域貢献なのかということで、大変悩まれたという法人さんが多かったですね。

そこで、社協のほうに、何をしたらいいのかなというお尋ねもありました。そこで、こういうことでも大変な貢献になるんだよということで、今、そういう社会福祉法人、特に施設を経営しているところは、場所を貸していただけます。そして、中には、自分のところの車まで、送迎バスを日中は空いていると。

朝晩は使うけども、日中は空いているということで、それを貸してもらえるということでありました。

運転手さんの問題は別でありますけれども、社協というのは、たまたま、今まで送迎ボランティアというのを育成してまいりました。その方たちによって行われているところもございます。

それが、コミュニティカフェとは別でありますけれども、買い物支援なども、ひとり暮らしでご高齢の方、今発表されたような地域の方は、山坂、高いところにお住まいの方が多くて、スーパーは下のほうにあるということで、大変お困りであります。そんなことで、３年前からになりますけれども、買い物支援というものも進めた。これもコミュニティの一つだと思います。ゆくゆくは、その途中にカフェに立ち寄ってみようと。立ち寄って、買い物のついでにコーヒーを飲んで、おしゃべりをして、また送ってもらおうと、そんなことができればというふうに思って、今、途中であります。

ですから、法人さんが困っていれば、ご相談いただけるといろいろ開けてくるのかなというふうに思っております。

それから、カフェを立ち上げるときには、社協の予算の中から、地域の皆さんにお世話になっております、年末助け合い運動というのがあり、この資金から、カフェが立ち上がるときには、最大１０万円の初

度調弁といいましょうか、コーヒーのメーカーであるとか、何かが必要だというご支援をさせていただいております。

それから、長期運営されているところには、その都度、毎年毎年、全体予算が変わってくるものですから、できるだけの助成金ということで、させていただいております。多くの部分は、市からいただいております大きな大きな助成金で社協は成り立っているわけでありますけども、地域の助け合いが、カフェのこれからの運営には大きく関わってまいります。年末助け合い運動であるとか、社協の賛助会費だとか、どうぞよろしく、皆さん、お願いいたします。すみません。ご協力、お願いいたします。

市長：ありがとうございます。

いや、施設だけの話ではなく、実は、宮前区はすごいんですよ。この社協とですね、僕もこの地域の中の交通問題というのが、意外と、先ほどの施設の送迎する車、あるいは幼稚園の送迎で使っているとか、時間帯によっては、かなり使えるんじゃないかというふうなことを言っていたんですけど、宮前区の社協さんが、まさにボランティアでドライバーをしていただいてという、買い物支援まで行うという、これはものすごく先駆的な取組だというふうに思っていて、本当に浮岳会長に、心から敬意と感謝を申し上げたいというふうに思っています。

伊藤センター長、やっぱり、いろんな施設というと、まだまだ活用の域というか、あると思われませんか。ちょっとコメントいただいていいですか。

浮岳さん：伊藤さんのところには、車は貸していただいています。

市長：車を貸していただいている。いや、すごい、もうダブル、トリプル貢献ですね。

伊藤さん：先ほどのパンカフェで、れいんぼう川崎という障害者支援施設をお借りしてというところで、どうしても介護は介護、障害は障害、児童は児童というところの垣根があることを、私自身は、問題かなと考えているところがあるので、この垣根を取っ払って、本当に社会福祉法人同士で、分野を限らずというところで交流やコミュニケーションがとれるような、そういったものが定期的にできるようになってくると、そういった施設だったりとか、いろんな社会資源をもっと活用できるんじゃないかなと、私は個人的には考えてはおります。

市長：ありがとうございます。

それと、人の話というのは、先ほどもすばらしい、何かこれが得意だ、音楽が得意だとか、こういうことができるよというのって、地域の人たちはいっぱいありますよね。さっきのコーヒールンバの話もそうですけども、おもしろいことを考え出している人って、こんなにいるんだなと。こういう地域の人材発掘って、どういうふうにやられているんでしょうか。誰か、こういうことをやっているよという方はいらっしゃいますか。

鈴木さん、突然すみません。指して悪いんですけど、このグループでちょっと。

鈴木さん：ここが、Ｃａｆｅ宮前という、先ほどのそちらと同じような形のグループになるんですけれども、母体が市民館から始まっていまして、市民館からカフェをやりませんかというような形から、皆さん集まって、いろんなグループになっているんですね。市民館のロビーをお借りして、先ほど場所とおっしゃいましたけど、私たち、図書館に行く通路のところをお借りして、やっているんですね。

市長：通路ですか。

鈴木さん：広いんですよ。図書館まで行くところの通路が。そこに今、一応、テーブルと椅子を置いていまして、ちょっとつい立てをして、おいしいコーヒーのにおいを皆様にかいでいただきながら、図書館に行った方たちが寄って、お話をしてくださるというところなんですね。

先ほど、おみそとか、コーヒーとかつなぐものは何ですかとおっしゃいましたけど、私たちのグループは、国際おしゃべりサロン宮前というところで、みそと一緒にしちゃ申しわけないですけど、外国人の方がつなぎになっているんですね。今ここにもタイのジャンディさんがいるんですけども、私たちのグループの中にもタイ、韓国、マレーシア、あと中国もいるんですけれども、そういう人たちもスタッフに交えて発足し、カフェの中で１時間、毎回毎回、外国人の方に日本語で自分たちの国を紹介してもらうということをやっているんですね。

そうすると、ここら辺って知的好奇心の多い方がたくさんいらっしゃるのと、あと、海外経験の多い方がいらっしゃるので、僕そこ行ったとか、私そこ行ったことありますとか、というようなことでつながれるかなというところです。

市長：なるほど。すごいですね。年代を超えて、国籍も超えてという。

鈴木さん：そうですね。結構いらっしゃるんですよ。なかなか、奥さんがとか、外国人の方で、外に出ても話す人がいない。あと、ごみの出し方がわからない。寂しいという方がいらっしゃって、そういったところを市民館の方も発掘をして、私たちもそこに乗っかってというようなことから、私たちは始まっているんですけど。

市長：なるほど。いろいろ出てきますね。ありがとうございます。
川西さん、補足ありますか。

川西さん：今、ここのテーブルは、みんな、今ご紹介あった宮前市民館が、２０１８年ですかね、講座を開いて、その講座を受講したメンバーが、今六つのグループをつくって活動しています。今、国際のグループだったんですけれども、あとは、たくさんあるんですけども、サポーターズカフェという、障害を持つママたちの相談をしたり、あるいは行政の保健のプロの人たちにつないだりという、コーディネーター役をしているグループであるとか、あるいは、ロビーカフェのように、毎回やることは違うんですが、今、非常にヒットして、さっき４０人で驚いていらっしゃいましたけど、５０人、６０人入る狭い通路、一応、広場に今なっているんですけれども、何をやっているかというと、今、スマホで孫とつながりたいという地域ニーズがあることを捉えて、スマホの扱い方、それをちゃんと、みんなで楽しみながらやりましょうということで、非常に多くの来場者が来ています。

それからあと、ＣＡＦＥバルーンというのは、バルーンアート、風船を膨らませて、子供たちによく。それを通じながら、市民館で活動しているいろんな諸団体の活動様式を、あと、おしゃべり日和もそうですけれども、市民活動を先にやっている先行の人たちの活動様式をいろいろ教えていくという、やっぱりこれも、コーディネーター役をしていて、実は、去年の６月ですけれども、サードプレイスという言葉が今、行政の中でも非常にはやっていますよね。自分の自宅でもなく、会社でもなく、第三の大人が憩える自分の居場所を見つけましょうということで、今、図書館をのぞいてみてください。ほかの世代から問題が出るほど、クレームが出るほど、シニアの男性の図書館占有率が非常に高いんですね。非常にあったかくて、寒くもなくて、しかも長時間いても叱られないという。要するに行き場のない人たち、場所が、ち

ょっと、そう言うと語弊がありますけど、本当は行き場が欲しいんだけれども、なかなか手ごろな行き場がないというシニアの男性って、やっぱりずっと、もう退職の問題から、２００７年からずっと続いて問題になっているんですね。そういうような人たちが、ひとりでも、何も用がなくても、ちょっと協賛金１００円はかかりますけれども、おいしいお茶を飲んでいただいて、そこにいる話したい女性がいれば、その人たちと、スタッフとしゃべるというような感じで、居場所に今、なりつつあります。

一つ特例をちょっと申し上げたいんですけれども、去年、市民活動をやっている人たちの情報を、まだこれからやろうと思うけど、どうやっていいかわからない人たち、あるいは宮前区に転入してきたばかりで、何もわかっていない人たちに届けようということで、これは区役所の企画課の未来のプロジェクト、それと一緒に、ちょっとネットワークを張らせてもらって、ちりばめ図を張って、情報の提供をしましょうということで、カフェの皆さんに賛同を得て、みんながコンシェルジュになって、たすきをかけて、二日間、情報提供したんです。市民が市民による市民への情報提供です。

いろんなところに情報って散乱しているんですけど、一目で平場で見られるって案外ないんですね。だから、カテゴリー分けをして、そこに来ていただいて、そこにちょっとご案内する。いらした市民と、経験している市民が同年だと、非常に話が弾むんですよ。男性のシニアが、何だろうなと思っているところへ男性のシニアが入ってきて、僕も実はこうだったよみたいな話からということで、去年、一人の男性が奥様にお尻をたたかれて、ちょっといらしたんですね。奥様いわく、この人は退職してから、お家で木工のおもちゃばかりつくって家がもう満杯で、何とかしてほしいということをご相談になったので、じゃあ発表しませんかと。生涯学習で大事なのって、勉強することもですけど、やっぱり発表の場がないと、続いていかないじゃないですか。それで、カフェをご案内して、カフェに今、毎回、毎月自分の作品をお持ちになっています。子供たちも、もちろんですけど、同年配のシニアの人たちが、どうやってそれをつくったのみたいな話で、今、彼はどういうふうになっているかというと、県のほうのそういうおもちゃをつくるところにも登録もしましたし、宮前市民館がやっている子供の遊びの広場にも、ちゃんと登録して、この春休みには、自分でキットをつくって、子供たちと一緒にそれをつくろうと。彼いわく、僕はコミュニティカフェで人生が変わったと、そうおっしゃっているので、やっぱりシニアの男性をいかに発掘するかって、非常に難しいんですけど、何かそういう、ちょっとスキルを持った方が来られるような、情報発信をするところには必ず情報が集まるので、そういうことが必要かなと思っています。

市長：ありがとうございます。すばらしいですね。

いや、さっきの医師だけじゃなくて、川西さんも、いい処方せんをその男性に書いていただいたんじゃないかなというふうに思います。

いや、出てきますね。パンやみそから始まりましたけど、スマホから、何からって、外国からというので、いろんなことが出てくると、いいアイデアが出てきますね。だから、はっと驚かされるというか、確かにシニア世代のスマホ、これを教えてほしいなってありますよね。私の両親もそうですけど、本当に誰か教えてあげてほしいというのはありますよね。

三好さん、どうぞどうぞ。

三好さん：今、シニアのお話が出ましたので。私ども犬蔵シニアクラブ、老人会ですね。犬蔵カフェという高齢者の地域のコミュニケーションをつくろうとして活動しております。主体は自治会です。実際に運営に携わっているのは、自治会の役員の方数名と、私ども、お年寄りが相手だから、やっぱり老人会がいいだろうということで、シニアが担当してくれという要請が自治会からございまして、指導部として担当しております。

あとは、民生委員の皆さん、犬蔵には９人おりますが、９人の皆さんがお手伝いをいただきます。それ

から、場所が、犬蔵自治会館があるんですが、五、六十人入るといっぱいになっちゃいますので、地域包括支援センターですね。そちらのほうの会場をお借りしてやっております。何せ１２月のコンサートになると、なぜか音楽の受けがよくて１００人ぐらい集まるんですね。ということで、自治会館ではどうしても手狭なものでから、地域包括の部屋をお借りして、開催をしているようなんですね。

自治会が主催といいますか、私はシニアを担当していますので、自治会が主催していただいて一番ありがたいのは、費用が、実際に参加される方に１００円頂戴して、コーヒーやらお菓子やら、あるいは出演者の、ときにはお礼やらということで賄わないといけないんですけども、固定する人数じゃないものですから、毎回、足りたり足りなかったりで、ほとんど足りない場合が多いんですが、自治会が参加して、参加してというか、主体になっているおかげで、自治会費で支援をいただいています。これは非常に助かっています。どちらも費用の件で、お悩みかもしれませんけども、私どもは、そういう面では大変恵まれているなというふうに考えています。

市長：ありがとうございました。

このままずっと続けたいんですけど、しかし、一応構成がありまして、また、もう一回、帰ってきますが、一旦、ここでご発表いただけるんですよね。

ということで、一回、マイクをお返しします。

司会：どうもありがとうございます。

では、次のトピックに移りたいと思います。

宮前区では、地域の情報を町名ごとにまとめて発信する「宮前区ご近所情報サイト　みやまえご近助さん」を制作し、宮前区全町内・自治会連合会にご協力いただきながら、情報を継続的に発信していく仕組みづくりに取り組んでいます。サイトの概要と今後の展開について、宮前区全町内・自治会、石川閣副会長から、ご説明をいただきまして、市長からコメントをいただきたいと思います。

石川さん：今ほどご紹介に預かりました、宮前区全町内・自治会連合会副会長の石川でございます。よろしくお願いします。

今日は、「みやまえご近助さん」について、お話ししたいと思います。

皆さん、ご近所という言葉になじみがあるでしょうか。これは、向こう三軒両隣、顔の見える関係づくりが困ったときの支えにつながるという、近所と助け合うを合体させて言葉です。私ども町内会・自治会活動にかかわる者は、このご近所、地域に根づかせるとともに、安心・安全で暮らしやすいまちづくりになると信じて活動をしております。

こうしたことを宮前区で子育てをしている若い世代の方々に知っていただきたい。地域の活動に関心を持っていただきたい。災害時には、ともに助け合うまちづくりを一緒に担っていきたい。そんな気持ちで始めたイベントが、左側の写真であります。宮前ご近助ピクニックです。１，０００人を超えるたくさんの方々にご来場いただきました。このご近所の考え方を同じにして、区が地域での緩やかなつながりづくりを応援するためのホームページをつくるということで、私ども区町連も協力の依頼があり、今回、関わることになりました。

このホームページを立ち上げるため、子育て世代の方々に、アンケートやヒアリングを行いました。子育て世代は、ベビーカーで行ける徒歩圏域、つまり町内会、自治会くらいの小さなエリアでの安心と、愛着と、居場所にかかわる情報を求めていることがわかりました。町内会・自治会は、日頃から「安心＆愛着＆居場所」を感じられる地域づくりに取り組んでおります。子育て世代の方々と同じ地域で、同じ目標を持っているのに、町内会・自治会活動に参加することによって、それらを感じられることが、知られて

いないということがよくわかりました。

これはご近助ピクニックで行った、タイプ分けアンケートの結果です。戸建てかマンションかで、少し違いはありますが、一番右側の円グラフをごらんください。子育て世代の６０％は、地域と積極的にかかわろうとする気持ちがあることがわかりました。子育て世代の中でも、地域とかかわりたい気持ちがあるご家族、未就学児がいて、活動の範囲がいまだ小さいご家庭をターゲットとした情報発信により、町内会・自治会を初め、そうした地域の活動との接点をふやしていくことが重要と考えています。

最後になりますが、宮前区全町内・自治会連合会は、来年度もご近助の取組をさまざまに進めてまいります。写真のご近助ピクニックも、来年度から区の防災フェアと共同開催できると聞いておりますし、若い世代の方々と一緒に取り組んでいきたいと思います。

それでは、サイトの細かな点については、区役所に説明をバトンタッチいたします。よろしくお願いします。

宮前区役所：こちらのサイトは、皆様が身近な地域の情報を知り、地域の活動に参加するきっかけづくりにしてもらうことなどを目的としています。パソコンでも、スマホでもごらんいただくことができます。

こちら、右側が、このサイトの一番の特徴であるご近所情報の画面で、町名ごとに情報を発信しております。例えば平という町名を選択すると、ページが移動します。こちらですね。平のページに移動すると、一番左の画面になりますけれども、活動情報、活動している団体、地域情報にカテゴリー分けされております。活動情報は、例えば自治会がやっている避難所開設訓練や、子ども会のバスツアーなどが載っています。こうした情報が町名ごとにみられるようになりますので、これから皆様のカフェの活動も、順次載せていきたいと思っておりますので、ぜひ、情報提供をお願いいたします。

このサイトの二つ目の特徴としまして、こちらもご近助コンシェルジュに活動いただくということで、区内を九つの地域に分けて、全員４０代の子育て世代の方々に就任していただくことになっております。担当地域の活動を取材して、子育て世代の視点で記事を書いたり、町内会・自治会の窓口となって、活動情報を受け取って発信することなどをお願いすることになっております。コンシェルジュに活動情報が集まっていくことで、新たなつながりが生まれることを期待しております。

あと、町内会・自治会のことを知っていただくためのページもありまして、加入フォームのページから、スマホで簡単に連絡できる仕組みも取り入れています。

先ほど、冒頭にご紹介したアンケートで、子育て世代の方が地域の居場所を求めているということがわかりましたので、皆様のカフェを紹介するコミュニティカフェ情報のページも、これからつくっております。これ以外にも、地域包括ケアシステムの説明や、統計情報ほか、いろいろな情報を載せております。

３月中旬に公開の予定ですので、でき上がりましたら、ぜひ、ごらんいただきたいと思います。

ありがとうございました。

司会：どうもありがとうございました。

市長：発表ありがとうございました。

ご近所情報サイト宮前ご近助さん、これはすばらしいですね。まず、宮前ご近助ピクニックへ行かれた方はいらっしゃいますか、この中で。左半分、いらっしゃいますね。ありがとうございます。

鷺沼のフロンタウンでやったんですけれども、僕もお邪魔しましたけども、自治会・町内会の主催イベントで、こんなに若い人たちが集まっているのを、僕は見たことがないというほど、ほとんどが親子連れ、若い人たちが物すごい入っていました。そこで、自分の住んでいるところはここだと。避難所ってここなんだというのを子供と親で一緒に確認している。自治会・町内会は、ここかというふうなことを認識して

いただくみたいな形で、そういうすごくいいイベントで、もう本当に感動しました。

いろんな、今ご紹介あったようなアンケートをすると、若い世代の人たちも、イメージ以上に、地域の中に何か参加したいという思いはあると。だけれども、うまく、やっぱりマッチして、さっきのコンシェルジュの話がありましたけども、うまくこういう情報があって、ここいいよ、こんなところあるよというふうなのをマッチさせてあげると、本当に子育てしながら大変だと思っておられる方というのはたくさんいるので、そうした人たちが、多世代でつながることによって、もう本当にほっとするというか、ここのまちっていいまちだなと思ってもらえる、そういうふうなサイトになるということをすごく期待したいなというふうに思います。

これ、何といってもやっぱり、すごく細かく分けてあるところがいいですね。町会単位ぐらいでしょうか。町会単位よりもうちょっと大きいんですかね。ぐらいの区分けがしてあるということで、身近な情報を発信していってもらえればなというふうに思いますし、コミュニティカフェのことについても、これからやっていくということですから。

先ほどのコンシェルジュの話がありましたけど、今、新しいコミュニティ施策の基本的な考え方というのをお示ししましたけども、これは皆様方のように、いろんな地域でやっている活動というのが、例えば、自治会･町内会だとかという地域単位のところに､落ちていない活動というのがたくさんあるんですよね。ひもづけられていないというか。例えば、いい、こういう活動をされているというものが、そんなのどこでやっているのというふうな話が、ちょっとよくわからない。先ほどもありましたけど、自治会・町内会にもひもづけられていないということだと、地域の人たちにわからないということになるので、そういった意味で、まちのひろば、そして各区にソーシャルデザインセンター、いわゆるコンシェルジュ役ですよね。市民が市民の情報を、市民が提供していくというふうな、そういった中間支援を行うような機能を、これから、どんどん広げていきたいなというふうに思っております。そういう意味では、このサイトに僕はすごく期待したいなというふうに思っています。

石川副会長、ありがとうございました。

司会：どうもありがとうございました。

今、市長のほうからも、期待したいなという言葉、ありました。ぜひ皆さんも、このサイトをご活用いただきまして、さまざまな方とつながっていただければなと思います。ありがとうございました。

では、最後のテーマに移りたいと思います。「宮前区における見守り・支え合いの輪をひろげるために」ということで、会場の皆様が、具体的にどんなことができるか、またカフェ連絡会として、これからどのような取組ができるか、話し合っていきたいと思います。

では、ご紹介させていただきます。「みやまえカフェ連絡会」川田和子代表です。

宮前区に５０カ所以上あるコミュニティカフェのネットワーク化を目指し、みやまえカフェ連絡会を中心となって立ち上げた川田代表には、カフェ連絡会のこれから目指したい方向性についてお話しさせていただきます。

発表後、意見交換につきましては、また市長のほうに進行をバトンタッチさせていただきます。

では、会長、よろしくお願いいたします。

川田さん：本日は、ありがとうございます。私、みやまえカフェ連絡会の代表をさせていただいております川田と申します。よろしくお願いいたします。

連絡会の方たちには、再々お話はしていたのですが、またちょっと確認ということで、お話をさせていただきます。

今、スクリーンのほうに出ていますのは、今、手持ちにある写真だけですけれども、一部のカフェの方

たちの様子を写し出しておりますので、これをごらんになりながら、お話を聞いていただければと思います。

働いて社会を支えるサイクルが、少子高齢になり変わりつつあります。行政は少なくなっていく財源で、大きな仕組みづくりをしていかなければなりません。例えば、高齢者対策として展開されている介護保険ですが、利用できる人は認定で決められていきます。要介護にならないための要支援制度はなくなりましたが、その対象となる方の予防のためのサービスは残っています。しかし、要支援にならないためのサービスはありません。

元気寿命を維持することは、とても大事です。元気寿命を維持するための一つとして、皆さんが展開するカフェの存在があります。たくさんのカフェを行政が運営するのは無理です。顔の見える関係や、同じ地域や、宮前区で暮らす住民同士だから気づける関係があるからです。だから、共感できたり、お互い様の関係が生まれるのだと思います。また、運営者も元気をもらえるメリットがあります。生きることが楽しいと思える場所、自分のことを知っていてくれる場所、活力が出る場所、病は気からと思える病気を防げる場となるかもしれません。

カフェのあり方は、いろいろありますが、運営者がつながることで、自分たちのカフェの問題点や、課題を解決する糸口が見つかったり、運営スタッフが知識を持つことで自分のメリットとなり、茶飲み話として自然に人に伝えることもできます。そのための場として、連絡会はありたいと思っています。

これからも、宮前区役所や、宮前区社会福祉協議会と連携をとりながら、多くの情報を提供していきます。また、連絡会には地域包括支援センターも入っておりますので、そこからも情報を提供していただいております。一部の人が先導のではなく、みんなで連絡会をつくっていきたいと考えておりますので、年４回の集まりには参加できる運営スタッフの方には来ていただき、ご意見をお聞かせいただければありがたいです。

先ほど、社協のほうの浮岳会長のほうから、これからカフェを立ち上げる方には、助成金を差し上げますというふうなお話がありましたけれども、これは、実は連絡会が立ち上がるきっかけとなりました社協の主催である福祉フェスティバルというものがあるんですけれども、福祉フェスティバルのほうで、まえカフェみーやというのをやっているんですね。今、連絡会の方たちにも協力していただいて、一緒に運営していますが、それがきっかけとなってできたものなんです。ですから、皆さん方が、今取り組むものというのは、本当に行政本位ではなくて、皆さんたちが、自分たちでどういうふうにするのが、今一番いいのか。安心して暮らせるのか。そういうものを自分たちの手でつくっていく。これが一番確かなことなんですね。それに対して、変な言い方ではございますが、行政なり社協を利用していただいて、それで自分たちのためになることをどんどんやっていけばいいというふうに思っています。その橋渡しとなるのが連絡会なのかなというふうに思っておりますので、ぜひ参加していただいて、自分たちの今やっているカフェが、もっともっと発展できるように、私たちも、お力をおかししたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。以上です。

司会：どうもありがとうございました。

では、引き続きまして、市長、よろしくお願いいたします。

市長：ありがとうございました。冒頭に話したように、宮前区はやっぱり突出して、カフェが多いと思います。歴史も長いと思いますし、数も本当に多い。伊藤センター長が言われたように、まだわかっていないというか、それぞれいろんな地域でやっておられるカフェということも含めれば、もう多分もっと多い数になるんだろうと思います。やっぱり、これって大きな地域力になっているというふうに思うんですよね。

昨年の台風で大きな被害が出ましたけれども、自治会・町内会がすごいしっかりしているところって、

復旧が早かったです。

だから、いざというときにも、こういう地域のつながり、顔の見える関係というのが大事ですけども、ただ、災害時じゃない、いつもの日頃からの暮らしをより豊かにしていくと、安心できるという地域ってどういうものなのかというと、こういうつながりですよね。カフェみたいな、高齢で、ちょっとひとりで寂しいなという方もいれば、あるいは子育てで、すごくちょっと何か悩みを持っているんだよと思っている人も、どこかちょっと、しゃべるだけでも心が落ちついて、また日常に戻れるとかという、いろんな方たちがふらっと寄れる、そういう場ってすごく求められていると思うんですよね。

そういう意味で、どんどん広がっていってほしいですし、いろんなご苦労だとか、課題だというふうなのを、みんなで知恵を出して共有することによって、じゃあうちでもやってみようというふうな形になっていくというのが、川田さん、この連絡会のあれですよね。すばらしい取組で、本当に、行政のやることというのは、本当にものすごく限界がある。行政が何もやらないと言っているわけじゃないんですよ。そうではないんですけど、やっぱり地域の中で、身近なところで自分たちでやるというのが、最もやっぱり持続性があるし、みんなが、生きがいということだけじゃなくて、張り合いというか、誰かのためになっているという、そのことがまた喜びになっていくという、そういうものを地域のあらゆるところでつくり出していくということが大事かなというふうに思わせていただきました。本当にありがとうございます。

＜感想・意見交換＞

市長：今後の課題として、いろんな課題があると思うんです。ちょっと課題のこと、こんなことが課題だよと。今までも出てきたと思うんですが、こういうことが課題だと思っておられる方、いらっしゃったら、課題出しにご協力をいただきたいと思うんですが、いかがでしょうか。

皆さん奥ゆかしい感じなので、なかなか手が、今日は挙がらないですね。区長からは、皆さんものすごく手が挙がると思いますよと聞いていたんですけども。

吉永さん：カフェがあるのが、わからない。なので、例えばポスター的なもの。ここのエリアに、どこどこありますよとかと書いておいていただくと、あるんだ、第何曜日にあるんだとかというのがわかるかなと、ふと思いました。

市長：なるほど。ありがとうございます。

吉永さん：せっかくなので、最後１個だけお願いしていいですか。

我が家のそばに公園があります。公園は今、通学路です。その通学路、宮前区の公園に、ちっちゃな箱でいいですから、雨にも負けないライブラリーが欲しいです。

市長：ありがとうございます。まちライブラリー。実は川崎市の姉妹都市のオーストラリアに、ウーロンゴン市ってあるんですけども、そこの中心、何か通りのですね、メーンストリートのベンチの隣に、ちっちゃなボックスのような図書館みたいなのがありましたね。あれ、おもしろいなと、すごく思いました。

公園でですね。なるほど。ウーロンゴンで。ウーロンゴンの、たしか植物園の中にもありました。植物園の中にも、そういうボックス、ありましたね。あれ、すごいすてきなものだと思いました。

ほかに、課題。お願いします。

遠藤さん：私は南平台の市営住宅に住んでいる者です。地域の自治会さんとか、南平の私の地域では、三つの自治会が、建物ごとにできてしまって、そこに集会所が一つ。小さい集会所が一つ。それを利用して、

カフェを８年、集会所でやってきましたけど、まず、住民は高齢化して、何年か前に市長さんに多分、私は手紙を書いたんですが、子育て世代、若い世代を優遇して入れてほしいとお願いしたんです。それをかなえていただいて、去年の暮れから、子育て世代がたくさん入ってこられました。そうしたら、公園がものすごく満員になるんです。水曜日の午後、今日はもう、お昼に子供たちが帰ってくると、３０人ぐらいが公園に集まって、ものすごい大騒ぎです。でも、それがすごくいいなと思っています。

今のお話を聞いていて、やっぱりちょっと子供たちが入れる場所って、何かあったらいいなと思っております。今ある幼児の滑り台とかは、親は上ったらおりられない滑り台はいらないんじゃないのと、公園課に今、お願いしているんですけど、そこを取り外してやったりしたら、子供たちの走り回る部分が広くなるんじゃないかとか、そういう公園の使い方とかも。その団地の庭みたいにくっついている、本当にすぐ真下の公園なので、声もうるさいし、住民の反対の声ももちろんありますけど、これは時が解決するでしょうと言いながら、子供たちには事情をお話しして、静かに遊んでというふうに言っています。

今、残念だったのは、さっき自治会さんの話を伺っていて、自治会の情報が全く入ってこないんです。もう、本当に入ってこないのか、入ってきていても、役員さんのやり方なのかわからないんですけど、今回も合同の防災練習、避難訓練の練習か何かあったみたいですけど、そういう情報もポスターも張っていないというような感じなので、どうしても市営住宅の、ましてや自治会が三つにもなっているというのは、まとまらないんですね。

カフェに来てくださった方は、外回りのマンションや戸建ての方たちでほとんど支えていただきました。

だから、その方たちも入れるような南平の地域に、お金がかかって大変だとは思いますけれど、会館を一つつくっていただけたら、ぜひそれはお願いしようかと思っています。

よろしくお願いします。

市長：ありがとうございます。課題はかなり多岐にわたりましたね。まず、施設のことについては、やはり今一つの建物で一つの目的で使うことというのは、ほとんどナンセンスになってきましたね。ですから、一つの建物をいろいろな多目的で使っていくというような形にこれからしていかなくちゃいけないなと。

ただ、先ほど申し上げたような、例えば社会福祉法人のところの施設のスペースを使う、あるいは、今年から実験的に少し始めておりますけれども、これは昼間ではないので夜間なのでちょっとあわないかもしれませんが、学校の特別教室をもっと地域に開いていこうということを、モデル的に今やり始めました。

もっと有効に使えるところっていっぱいあるんじゃないかという、スペース探しをどんどんやっています。ですから、自分たちの歩ける範囲という、自治会・町内会レベルですね、その中でどういうものが地域資源ってあるのかなというのを探していくと、実は結構有効利用できるところってあるよねというふうなのが必ず出てきますので、ぜひ区役所もマッチングのお手伝いをさせていただきたいなと思います。

公園の遊具については、いろいろなご意見があります。大分高齢社会になってきておりますので、健康遊具というか、体操できるような、こういうものを外に置いてほしいと。子供のところだけじゃなくて、そういうシニアの人たちの健康づくりに使えるようなものを置いてほしいとかいう声もありますし、これは遊具交換のときだとかいうときには、必ず地域の人たちと意見交換して、こういうものを置きましょうということになっているので、ぜひそこは地域の皆さんで、よくよく皆で考えるということが大事かなと。

やってはいけないと思っているのは、行政が公園のスペックってこんなものですと言って、どんとやるって、これは絶対だめです。求められていないものを置くことになるので。だから、地域の皆さんと一緒に議論しながら、こういうものをやっていく、外していくというふうなことを、これからもやっていきたいなと思っております。

課題について。どうぞ。

高橋さん：土橋カフェは、会館を使わせていただいているので、大勢来ていただいていいんですけれども、地域の空き家ってありますよね。今、いらっしゃらなくなったお家もそうですし、福祉のほうで施設に入られて、今空き家になっているところ、そういうところを何かやりたい、サロンをやりたい、それからおひとり住まいで、うちに来てもいいわよというところがあれば、使えるともっといろんな活動ができるんじゃないかなと思うんですね。だから、ご近所さんだけで、いろんな人が来てもらっちゃ困るけど、ご近所の顔見知りだけならいいという人とか、そういう方たちと、やりたいという人たちのマッチングを、その顔見知りだけでできればいいんですけど、貸してくださいと言うには、行政のちょっと口添えがあれば安心してもらえるんじゃないかなと思うんですね。そういうマッチングの仕組みを何かつくってもらえるといいなと思います。

市長：ありがとうございます。すごいすてきなご意見です。実は、麻生区で一個始まったのがあります。それは、空き家。まさに言われた空き家を、その地域は自分たちの自治会、町内会館がないところです。そこに、やっぱり集まる場所が欲しいよねということで、空き家を町会のほうに貸し出していただくという形で、それは行政がかなり入ってマッチングをさせていただいたということがございます。これから、こういうマッチングってやっていかなくちゃいけないなと思っています。

幾つかこういう例がありまして、例えば川崎の南部のほうに行きますと、まだ木造密集地域というのがあります。そこは、一回火が出ると危ないなという話で、防災空地的な広場をつくろうと。そこに建っている空き家があると。そのまま放置されているということなんですね。あれ、建物を取り崩すと固定資産税が高くなるので、なかなか取り壊せないということなんですね。だけど、そこは行政として防災空地にするから、固定資産税を減免しますという形で、そこはモデル的に更地にしました。よって、防災空地というふうな形になりました。

ですから、先ほどの麻生区で王禅寺のほうなんですけれども、そこでも空き家があると。空き家のことを、どうにかうまくその所有者、そこにはもう亡くなられて、市内にお住まいではない方だったと思いますけれども、引き継がれた方ですね、ご家族とのご了解を得て、マッチングして、町会が管理している、そこがスペースになっているということもあります。

ですから、先ほどのお答えの運用じゃないんですけれども、地域にはいろんな、まだまだ活用できるスペースも、そしてちょっとした仕組みづくりをすることによって、まだまだ出てくるということですので、すごい貴重なご意見をいただきました。そういうところを少しお手伝いさせていただくということも必要なことだと思っていますし、やっております。

全く違う切り口で、結構空き家はだんだんふえてきていますので、この空き家にする前の段階から、よくよく考えましょうねということを、実はいろいろなところで今、やり始めました。こういう使い方がありますよ、こういうやり方がありますよという、何ルートかやっていますので、そういう中からマッチングできるものって、これから出てくるというふうには思います。ありがとうございます。

川西さんどうぞ。

川西さん：皆どこのカフェも、すごく頑張っていると思うんですね。運営の企画の発端の方とか、その仲間になられた運営者の方って。ただ、残念ながら、高齢化がやっぱりどんどん進んでいって、最初に運営の核になっていた人たちが、いろいろな諸事情でご自分自身がもう地域に出られなくなったとか、そうなると、その人のパワーが強ければ強いほど、運営が縮小してしまうという状況がいろいろなところで起き始めているんですね。

さっきの発表の「ふらっと」のように、町会・自治会のほうから人員の補充みたいなことが手当できるところはいいんですけれども、例えば私たちが活動している市民館というのは、行政区になりますよね。

別にどこの自治会とひもづけされているわけではなくて、浮遊しているような市民が市民館というところのステージに集まってきてつくってきた。私は、非常にこのあり方というのは、市民自治の力がすごいから、今まで継続しているんだなと思います。担当している職員の方にも、よく１００円だけで、もう市民館の補助は全部終わっていますので、もう８年目に入るんですけど、皆それぞれが頑張って収支決算しながらやってこれているんですね。皆さんからいただく１００円で。それは、とりもなおさず、やっぱりやっている人たちの自己実現、さっきパンの話が出ましたけど、やっぱり自分のパンを誰かに食べてもらいたいとか、私がハーバリウム好きだから、これを皆と一緒につくりたいとか、非常に素朴な自分のやりたいことが一番の動機づけになっているんですけれども、それだけではやっぱりちょっとやっていけないんですね。継続するためには、その自己実現プラス地域のニーズをいかに捉えるか、そういうアンテナも必要だと思うんですけど、もう一つはやっぱり見える化です。私たちは通路をステージにしましたが、あそこは通路なので、やっぱり見ていただけているんですね。そうすると、何をやっているんだろうとかって見える化によって、やっぱり関心を持ってくださる市民の方もあって、お尋ねがあったりするんですね。そのときに、一緒にどうですかって、声かけをもちろんするんですけれども。

なので、やっぱり見える化というのは非常に大事で、固定したクローズされた場所ではなくて、オープンスペースが非常に有効だなと。

これは最後に言うつもりでしたけど、鷺沼に移転する場合は、ぜひこのオープンスペースの確保をやっていただけると、宮前が脈々と培ってきた、この市民自治の力がもっと発揮できるかと思います。

それで、さっき困ったことと言ったのは、見える化によって、いろんな人の関心は得るんですけど、私たちの取組が非常に楽しそうに見えないと、皆さん入ってこれないじゃないですか。なので、そういう楽しそうにやっているよということを、ご近助サイトですか、今から広報をどんどんしていただいて、やっていただけるということなので大丈夫だと思うんですけど、若い人たちにやっぱり見ていただきたいというのと、それからもう一つ、先ほど井田病院の話が出ましたけれども、実は私たち、私はＣＡＦＥ　ＴＡＬＫのそのうちの一つに所属しているんですけど、そこに地域看護師さんが企画者としているんですね。彼女と一緒になって、哲学的なアプローチで、地域で生き生きするってどういうことというのを、２年前にやりました。上智大の哲学の先生に来ていただいて、ファシリテーションしていただいて。そこでもう地域で生き生きするってどういうことなんだろう、地域ってそもそもどんなエリアのことをいうのみたいなことから始まって、やったことを彼女が論文にまとめて、全国看護師学会に出しました。それが入選しまして、岡山の全国大会で発表することになりました。だから、宮前区のカフェの取組は有名です。岡山あたりで。

やっと、昨日も看護師の研究会があって、そこで宮前の保健師さんたちとお顔がつながって、どうしてそれがそういうふうに評価されたかって、私たちは作品展を年に一回やっているんです。皆いらっしゃる人たちがいろいろなものをつくったり発表したいと思っていらっしゃるので、それを年に一回発表する会を、ステージやって、作品展をやるんですけど、その作品展に出すという一回のことが、いかに市民の、さっき生き生きと、生涯元気でというその力を維持していくかということを彼女は看護師の専門分野から書いて出したんですね。やっぱり、細々とではありますけど、そういうふうに行政の人が知らないことを市民がやって、市民は楽しいからやるだけなんですけど、それを客観的評価として行政もきちんと評価づけをして、それを改めてまた出していただけるって、この循環があると、やっぱりもっと新しい人が来るんじゃないかなと思います。

鷺沼には本当に行ったときには、くれぐれもよろしくお願いします。

市長：ありがとうございます。

どうやって見せていくかってすごい大事な話で、この前も地域包括ケアシステムで全市的な会議をやっ

たんです。意見としては、こういう閉ざされた会議室でやるんじゃなくて、皆に楽しそうにわいわい会議をやるという、外でやろうというふうな話があって、それはいいなと思ったんですよね。一回、川崎駅前の地下街のアゼリアの通路のところでやろうかって思うくらいの。だから、皆でわいわいああいうところでやると、何やっているんだろうというふうなことになって、そうかという、ちょっと関心を持っていただけし、輪の中に入ってみようかという気にもなってくると。

だから、いろいろな雨のこととか天候のことだとか考えなくちゃいけないんでしょうけど、青空とかいうふうなことでも、公園で会議をやればいいじゃんとか、公園に皆椅子を持って行こうよというふうな形でもいいと思います。

何か、皆に見せていくって、すごく、こんな地域資源があったのかというふうなのを広く見せていくって、大事なことだなと思います。

先ほどの、宮前ご近助さんのほうもそうですけれども、本当にコミュニティカフェもそうだし、こども食堂もいっぱいやっているところがある。こども食堂も同じような形で、もうちょっと知らしめたいよねというふうな課題を皆さん持っておられますね。実は、こども食堂で始めたんだけど、皆、結局こども食堂で終わらなかったですね。結局は、全世代型の食堂になったと。子供で入ったつもりなんだけど、結局はコミュニティ食堂になったというのが、ほぼ、ほとんどですね。

というように、そういう場もあり、コミュニティカフェもありというふうなのが、あそこ、何々さんがやっているよというふうな形で、どんどんつながっていくと、また新しいものが生まれるんじゃないかなと思います。

例えば、こども食堂でも、私食材困っていますというふうな話だったときに、食肉センターのところから、川崎の港のほうにあるので、そこから実は寄附が来たと。定期的に寄附が来るとかいうような話があって、それはすごいですねと。農家から野菜が来たとか、何かいろいろなところから、そんなことを知ったら、ちょっとお助けできますよというふうなのが、手が挙がり出すというのは、やっぱり見えるように、皆が、活動が。そうすると、こういうことが必要です、これは誰かできる人と言えば、やっぱり手が挙がってくるというのもあるので、本当に掲示板の話だとか、こういうものだとか、やっぱり口コミだとかいうのが、一番強力なんだと思いますし、そういう何か、せっかく皆さんがやっているすばらしい取組を、もっともっとほかの人も、今は５０ですけど、もしかしたら、来年、再来年あたりには１００ぐらいになっているかもしれないですものね。というような、それこそ伊藤センター長がおっしゃっていました、新しい立ち上げの支援をしてくださるという話ですから、ぜひこういう課題だとか、それからノウハウをどんどんお互いに共有していくというのは、すごい大事だなと。

自分でも、僕も本当に自分で気がつかないことも、人から言われてああと思うことってたくさんあるので。

僕ばかりしゃべっちゃいけないんですけど、地域の寺子屋というのをやっていますけれども、年に一回なんですが、皆集まって情報交換します。情報交換すると、こんなことで困っているんだというのが、皆うわって出てくるんですね。だけど、うちはこういうことをやっているよ、こういうふうな対応をやることによって、そこを解決するよというのでやると、皆すごいすっきりした顔をしてお帰りになって、じゃあ今度やってみるって帰られますね。

ですから、この連絡会の役割って、物すごく大きいと思うし、そういうのがさらに発信していけば、もっと自分もやってみようかと、自分の地域にはコミュニティカフェまだないわという人たちが現れてくれるかなというふうに思っています。

今後のことについて。お願いします。

西村さん：私の理想としているコミュニティカフェというのは、東京の港区の芝にあります芝の家というの

があるんですね。そこのように、月に一回とかではだめだと思っているんですね。できたら、極端に言えば、毎日オープンしている。それでふらっと入れるというのが理想だと思っているんですね。だから、それに、私が今やっているところが、住所は平なんですが、住んでいるところは山の上なんですよね。なぜ平とついたのかと思うほど、山のてっぺんにあるので、だから、それで、出張所があるじゃないですか。出張所が余り活用していないように思われるので、ちょっと声が小さくなりますが、あそこでお借りしてやれば、例えば溝の口でお茶を飲もうかなと思ったのを、出張所まで帰って、そこでお茶を飲んでと言えるように、平に帰るにしても、一旦そこでお茶を飲んで帰れたらいいなと思っているので、もっと一週間に最低４回はオープンしたいと思っているんですよ。だから、あそこが借りられたらなと思っているんですけど、いかがでしょうか。

市長：ちょっと、即答しかねるので、後ででもいいですか。でも、皆狙っていますか。わかりました。
　すごいですね、皆さんどよめきましたけど、週４回に。すごいですね、理想が物すごく高くて、週４回やったら大変ですよね。だけど、それぐらいのニーズを感じておられるということですね。

西村さん：どこの会は何曜日にやっているから、じゃあ溝の口を出た帰りについでにとか、そういうふうにちょっと寄れるようなところがあれば、一覧表みたいなのがあればいいかなと思いますけど。

市長：本当に、やっぱり、せっかくやっていただいているのが、いつどこでやっているのかがわかるようにしないと、ちょっともったいないなという感じがしますよね。
　どうぞ、まず西村さん、どうぞ。

西村さん：私が全国のコミュニティカフェを調べたんですけれども、高齢者、障害者、子育てって、カテゴリーではあるんですが、認知症とかあるんですけれども、世代間交流をメインとしているカフェというのは６つしかなかったんですよ。それも、日本全国でですから、いかに続かないかということなんですよね。
　だから、今に西村さんのところもつぶれると言われているんですけれども。

市長：大丈夫、人材は確保できていますから。
　だけど、本当に若い人たちも含めて巻き込んでいくって、すごく大事ですよね。

西村さん：やはり災害のときに助けていただけるのは若い人なので、やはり常に若い人を巻き込んでいなければ、高齢者ばかり集まっていてはだめだと思っているんですね。

市長：本当に、隣の高津区で、中学生の消防団というのができていて、中学生も立派な、いざとなったらすごい力を発揮するって、いろいろな災害でありますけど、もう高津のほうは随分前から中学生を巻き込んでやっていたりして、そういうところから地域のことに関心を持っていただいて、いろいろな活動に参加するって。だから、どこかに地域にとっかかりがあると、次のところにも展開しやすくなるんだけれども、最初のとっかかりがないというところが、さっきのアンケートじゃないですけれども、思いはあるんだけれども、引っかかっていないという。だから、そこのきっかけを本当に、コンシェルジュじゃないですけれども、皆さんのような方々が、地域で活動している人たちがちょっと声をかけていただいて参加してというと、次の展開というのが、幾つも可能性が出てくるんじゃないかなと思いますね。

猪又さん：坂の上のカフェしらはたの猪又と申します。よろしくお願いします。

私たちは、しらはたと名前がついているので、白幡の地域に結構宣伝というか、ポスターを張ったりとか、今、白幡の老人いこいの家をお借りしてやっているんですが、そこにチラシを置かせていただいて、白幡には結構宣伝をしていると思います。やっぱり、ほかの地域でもカフェをやっていらっしゃる方がいるので、例えば平とかは、すぐお隣なんですけど、ちょっと気が引けるというか、悪いかなと思ったりもします。

この間は、ラブみやまえというイベントに参加させていただいたんですが、市民館で行ったんですけれども、場所がわからないという方が多いですと。あと、老人いこいの家をお借りしているので、年齢層が高いです。

宮前ご近助さんとか、パソコン、インターネットとかで見るのが多いんですね。白幡の場所はどこですかと聞かれて、ホームページを見てくださいと言いたいんですけれども、やっぱり来てくれる方が、７０、８０、９０代の方たちだとすると、やっぱり見てくださいとは気軽には言えません。地図を描くんですけれども、あと掲示板とかに張ってあるんです。メモを持って行って書くのは難しい、地図を描くのは難しいとやっぱり言われます。

今回は、私たちの宣伝というかチラシの裏に地図をつけました。そうすると、やっぱりわかりやすいと言われて、ここは坂ですよ、右ですよ、曲がってくださいねということを書きました。

あと言われたのは、回覧板にカフェの宣伝は載っていて住所も載っていますが、やっぱり調べるツールがないというのを、よく言われます。なので、宮前区の地区ごとでも構わないですし、ここと、ここと、ここにこういうカフェがありますよというのがあれば、すごいお年寄りの方と言ったら悪いんですけれども、来やすいと思います。そういうのが回覧板だと、ご自宅で写せるとか、メモできるという方が結構いらしたので、そういうのは実現できたらいいなと思います。

市長：すばらしいアイデアをありがとうございます。大事ですよね、地図。それもわかりやすい。ここ階段ありとかね、坂道急だとか。

それ、すごい大事ですね。こういう何か情報を共有できるということ自体がやっぱり連絡会のすばらしさなんじゃないかなと思います。本当にすてきなコメントありがとうございます。

どうぞ。

浮岳さん：今度は社共会長じゃなくて、私の地区社共で主催しております、カフェ桃花というカフェがございます。今日、代表来ていないかな。来ていないですね。顔見なかったですね。

今日もちょっと、午前中の会合で話が出たんですけれども、やっぱり坂道がある、交通が不便であるというようなことから、なかなか一カ所では行かれない人がいる。ですから、三カ所を今確保していあるんですね。その中の、一つはまじわーるという地区会館なんですけれども、そこをメインとしておりますけれども、あとは老人ホーム、あとはそれから児童養護施設の愛児園さんの場所をお借りして、そこの場所を利用してカフェを開催しているんですね。そうしますと、こっちの端から端まで移動するのは大変ですから、その地域の人がそこへ行かれると。毎週はできませんけれども、そこへ行かれるというようなことで、少し解消になっているかなということです。

それともう一つは、去年から始めたんですけど、カフェ桃花の桃花まつりというのを、大々的に打ち上げようと、皆に知ってもらおうということで、３町会があるんですけど、３町会を挙げて一緒にお祭りをしようと、その中に、協力していただくのは包括支援センターさんと、薬樹薬局さんというのが全面的に協力して、健康器具等々を、健康相談を全無料で、ボランティアで一日やっていただけるというようなイベントをやりました。今年も９月にやるということで決定しておりますけれども、そういうことで地域の中で、カフェ桃花の存在を知らしめるためには、大変役立っているような、年に一度ですけれども、祭り

として去年始めて、今年２回目ですけれども、それも有効かなというふうに思っております。
今日は代表が来ていないものですから、さっきあそこにカフェ桃花の写真が一枚だけぱらっと出ましたけれども、そういうことで少し解消になっているかな。
ただ、なかなか移動手段が、宮前というのは山坂が多いものですから、ご高齢の方には非常に厳しい地形であります。ですから、もう少しバスの運行を細かく運行していただきたい。その辺が課題かなというふうに思っております。
ありがとうございました。

市長：ありがとうございます。
いろいろありますね。課題はたくさんございますけど、でも、本当に一カ所じゃなくて、三カ所に分けてというふうなの、すごくなるほどと思いますよね、これも。

浮岳さん：ご高齢の今お住まいにならない家を利用させてもらって、町内会を主体として、ふらっと寄ってほしいという意味から、「ふらっと」というカフェを運営している町内会もあります。私どもの地域の中なんですけれども、そんなことがありますので、私どもの地域の中なんですけれども、そんなことがありますので、いろいろなやり方があっていいと思うんですけど。
それから、資金の面では、全部満足はできませんけれども、立ち上げるときには、一回社共にご相談ください。

市長：ありがとうございます。今日はインターネットでも配信されていますので、社協にものすごい問い合わせがいくかもしれないですね。ありがとうございました。
でも、今、浮岳会長言われましたけれど、児童養護施設のところを借りてという形ですよね。児童養護施設のお子さんたちにとっても、非常にいい交流になりますよね。だから、本当にちょっと違うものを掛け合わせると、本当にいい価値が生まれるという典型例なんじゃないかと思います。
「何か一見違うようなものというふうなのを少し掛け合わせていく」。川崎の新しいコミュニティの考え方のキーワードが市民創発という、創発というのは生物学の言葉らしいんですが、違うものがぶつかったり、掛け合わさったときというのは、予期もしないような新たなものが生まれ出すというふうなことなんですが、まさにそういうものをコミュニティカフェという場を通じて、多世代だとか、あるいは障害の有無にかかわらずとかいうふうなので、いろいろな方たちと一緒に、先ほど外国の方というお話もありましたけれども、こういうものを掛け合わせていくと、すごい広がりが、今までになかった広がりもどんどんふくらんでいくんじゃないかなという、そういう期待をすごく感じさせていただきました。
しかし、本当に宮前区は市民活動が非常に盛んですし、意識が非常に高い方がたくさんいらっしゃるというのは、本当にうれしいというか、すばらしいなというふうに思いますね。
坂ですね。坂。これは、データ的に見ると、本当は坂って健康づくりには非常にいいと。長崎県は結構長寿。宮前区は特にご長寿のまちですけれども、一方で健康寿命は全国を下回っているということなので、健康寿命と本当の寿命との差が余りにも激しい、余り喜べないことなので、先ほどもありましたとおり、どうやってケアが必要にならないようにしていくかということを、地域の中で、ふだんの日常生活の中でやっていくと、仕組みづくりの中でやっていくということが大事かなというふうに思っています。
そういった意味でも、人が交流するというか、出会う場というふうなのから、次の何かがあると思うので、このコミュニティカフェの意義というのはものすごく高いし、皆さんのやっていることって、本当にすばらしいと思います。
ぜひ、これからも頑張っていただいて、ネットワーク化していく、さらに広げていくということに、ぜ

ひお力添えをいただきたいなというふうに思っています。

私たち行政も、区役所ももちろんそうですけれども、いろいろな人たちをつなげるということに頑張っていきたいというふうに思っておりますし、よろしくお願いしたいと思っています。

ちょっと、せっかく区長が座っているので、区長からも。

区長：髙橋です。実は、私おしゃべりなので、ここにずっと座っているのが辛かった。市長がお気遣いいただいたので、少しだけお話をさせていただきます。

まず、去年、ご近助ピクニックというものが開催されました。近くに住んでいる人同士が助け合うという、ご近助という言葉、大変すばらしい言葉で、私は地域の皆様からご近助という言葉をプレゼントしていただいたというふうに感じておりますし、新年のインタビューとか、そういった場面でも、テーマはご近助ということを言っております。そして、さらにご近助コンシェルジュ、それから今日話がありました、ご近助さんというものを、この三つのご近助をうまく使って、多世代がつながるようなまちづくりになればいいなと思っております。

このご近助さんという名前なんですが、市役所には情報サイトって、すごいいろいろなものがたくさんあるなかで、この名前はやや変わっているかなというのがあると思うんですが、実は区長室に職員の皆さんが来て、今度、情報サイトを構築しますということの話があり、名前はどうしましょうかというときに、いろいろな候補があったんですね。役所っぽい名前もたくさんあったわけです。私は、地域の人は何て言っているのと言ったら、ご近助さんということなので、じゃあご近助さんでいこうというふうにして決めさせてもらいました。

それはもう、とにかく皆さんに使ってもらいたいという思いです。行政が勝手に名前をつけて、皆さんどうぞ使ってくださいと言うよりも、皆さんに愛着のある名前で使っていただいたほうが、大変いいかなというふうに思い、そうさせていただきまして、この三つのご近助を大切にしていきたいというふうに思っております。

ネーミングの部分について、私は何が言いたいかというと、私は皆さんの思いに答える人間であるということでございます。

これからも、どうぞよろしくお願いします。

市長：ありがとうございました。ものすごくいい締め方をしていただきました。

３月から運用開始ですね。ご近助さん。ぜひ、若い世代に「ご近助さん」が大ブームになっていたらうれしいなと思っています。

こういった、ＩＣＴを使った情報発信も大事ですけれども、一方でやはり、なかなかインターネットへのアクセスというのは難しい方ということにも、当然配慮が必要だというふうに思いますし、一つやれば何かがうまくいくというものではありませんから、何層にも幾つにも重ね合わせていくということが、合わせ技一本でいきたいなというふうに思っています。

ぜひ、これからも皆さんのご活躍とご協力をよろしくお願いしたいと思います。

西村さん：もうひとついいですか。ネーミングの件ですが、老人いこいの家なんですよね。老人をとっていただいて、いこいの家にしていただけると。老人しか行かれないのかなというふうに思っておりますので。ぜひ。

市長：本当に時代にあわない言葉ですが、実は条例で決まっている。条例を変えるというのはあるかもしれませんけれども。

西村さん：条例で。

市長：そうなんですね。法律も老人福祉法というふうになっていたりして、ちょっと今の時代だと、違和感のある言葉が結構あったりするので、すぐ変えるというのはなかなか難しいところです。ただ、今、老人いこいの家と、こども文化センターの交流をという形、特に合築というのは、もっともっとやっていいよねというのでお願いしているところというのはあります。

やっぱり、それこそ老人いこいの家は夜になるとしまうというですから、これは開けるとその分だけまた費用がかかるという問題もありますが、そういう公的な施設以外のところでも、先ほど申し上げたように、使えるところっていっぱいあるよねという話もありましたので、そういう点は、もっともっと知恵を出してやっていきたいなと。そこを地域とうまく使っていただけるというふうになるように、好事例としていきたいと思います。ありがとうございます。

すごい変なしまり方となってしまいましたが、本当に今日はお忙しい中、ご参加いただきましてありがとうございました。

今日は本当に、新型コロナの話でいろいろなところで自粛が始まっているということですが、まだフェーズ的には国内感染発生期ということで、まだ自粛をお願いするという状況ではありませんが、一般的な感染症と同じような対策をしっかりとやっていただくということが大事ですので、ぜひご協力をお願いしたいなと思っております。

こんな中、皆さん本当に貴重な時間をいただきまして、ありがとうございました。

大変私も刺激と勉強させていただきましたし、ぜひこれから、宮前区のカフェ連絡会が、どんどん発展していくことを、心から願っています。本当に、今日はありがとうございました。